

## 第7回講義レポート

学術会議事務局・齋藤 敦  
乃木坂スクール

第7回のご講義は、政策意思決定における政治と世論ということを考えさせられるものでした。子宮頸がんワクチンの例と精神保健福祉法改正案をめぐる動きを対比させてのお話はたいへん興味深いものでした。

私も行政官生活の中でいろいろな事例を見聞きし、自らも体験してきましたが、厚生行政分野はまた独特のものがあるようにも感じています。特に、医師会、製薬メーカーというアクターの存在が突出して大きな存在であるということがあると思います。

しかし、民主主義的意思決定プロセスにおいては、多かれ少なかれ利害関係者による影響力の行使は避けて通れないものであることは間違いなく、その中でより良い結論に導いていく技を磨いていくしかないのだと思います。

かつて、その役割は行政、あえて言うと官僚にゆだねられていたと思います。すなわち、様々な利害関係者の中立的な調整者としての役割が期待されていました。これは、一般論として行政に中立・公平が求められるということ以上に、意思決定において中立的なアクターが官僚以外に不在であったということによると思います。

本来、国民の多数意思を体現して政策の方向付けをすべき政治家の多くが族議員化して個別の利害関係に深くコミットしているということの裏返しでした。政務に説明するとその話がすぐに外に抜けて逆向きの根回しが始まる、などということは霞が関のあちこちに転がっている話です。

しかし、このプロセスの限界も見えてきました。それは何より、官僚自身が組織という利害を自ら背負っているという限界があり、また、自分の老後の生活のために族議員ならぬ族官僚化せざるを得ない状況もあるからです。このような行き詰まりに対して「改革」が求められることとなります。しかし、「政治主導」も「公務員制度改革」も解決されるべき課題にジャストミートしていないのではないかと感じています。

私は、利害関係者の介入、影響力の行使は民主主義的意思決定プロセスにおいて必ずあることで、それ自体が不健全なことではないということを前提に、いかにより良い意思決定プロセスを形成していくか、という問いを立てることが重要だと思っています。

勝負はいかにオープンな議論の土俵を設定するかにかかっていると感じています。

オープンな平場の議論において、さすがに「精神病院の病床を埋めるために認知症患者を受け入れよ」とは言えません。しかし、密室で政治家から言われると行政官は抵抗できません。オープンな場で議論すれば、一応、万人に説明できる理屈を述べなければならないですから、それが満天下にさらされれば、いろいろな反応が返ってくるでしょう。世の中よくしたもので、どこかにはその分野の専門家でまっとうな考えの持ち主がいて、正論を論じてくれるものです。そうして論点が明らかになれば、それでどうすべきかについて国民の多数は理解し、正しい選択が多数意見を形成することが期待されます。私は日本国民のレベルはそこまで来ていると思っています。

結局民主主義のプロセスをうまく回せるかどうかは、国民を信頼するかどうかにかかっているのだと思います。国民のレベルは、政治家が思っているほど低くはないのです。

政治家の中には（官僚の中にもいますが）、なぜか国民をまったく信頼しない、ある意味で蔑視としか言いようのない感覚を持った方がいます。選挙で揉まれるうちにゆがんだ有権者観をもってしまっているのでしょうか。

その原因について、普通の国民があまり政治家に寄り付かないのに対し、政治家に自らすり寄る人は、何がしかの下心を持って自らの利益を引き出そうとする、そういう人ばかりを相手にしているうちにある種の愚民思想が醸成されてしまったのではないかと私は疑っています。

いずれにせよ、オープンな議論を展開する上で、マスメディアの役割は決定的に重要です。しかし、これがまた心配な点でもあります。子宮頸がんワクチンで行われたようなキャンペーン的報道？があまりにも多すぎることです。

私も杉並区住民として、娘にワクチン接種を行わせたかもしれないと思い、ぞっとしました。なぜ、日本のマスコミは一方向に流されやすいのか。もともと多様な意見を尊重するという風土が乏しい日本社会において、マスコミはそれを悪い方に増幅させる役割を果たしています。なぜか。

マスコミは自らを正義の使徒と位置付けたい傾向が強く、そのために、過剰に善悪の価値判断を振り回して、自らの立論と異なる意見を悪とみなしてしまう、このことにより引き起こされているように思えます。このことにより一旦醸成された世論は（反対論は悪ですから）、ワクチン副作用による重大事故のような目に見える弊害が明らかにされない限り是正されずに長い間残ってしまうのです。BSEの20か月齢以上の全頭検査が今やとなくなりそうなところまで来るのに10年かかりました。

私は、このマスコミの弊害を是正する上で、今日のネットSNSの役割に期待しています。例えば、ツイッター上の言論は、良質なものもそうでないものもあるのですが、質の悪いものに対してはそれなりに反論がなされて、ちゃんと議論できないようなものは淘汰されていくプロセスが働いているように思えます。少なくとも、議論の経過をフォローすることにより、こちらの判断材料を得ることができます。メディアは、何よりも、公正な言論を戦わせるアリーナ（土俵）の設定に真っ先に尽力してほしいと思っています。

それともう一つ重要なのは、今起こっている重大なことをいち早く発掘して報じることです。これは、一般人にはできない報道機関のみがなし得る重要な役割なのです。

なお、医療をめぐる諸課題においては、専門家集団としての医師会の役割がたいへん重要なのですが、現在の医師会はあまりに政治的にすぎて弊害が大きいと感じています。この点について、金澤先生とお話すると、公認会計士協会のような法に基づく全員加入の団体を別につくるべきとお考えなのですが、それが本当に国民医療の向上につながる解決策となるのか、少しでもプラスになるのかについて、私自身はまだ自信が持てないでいます。

以上、政策決定にかかわる政治家、行政官、マスメディア、そして関係者それぞれに課題がありつつ、政策意思の形成につき重大な責任を国民に対し負っているという自覚を持って活動することが求められていることを考えさせられたご講義でした。